

医療秘書の職業的アイデンティティ形成に関する人格発達心理学的研究

専攻 学校教育学専攻

コース 学校心理学コース

学籍番号 M07049D

氏名 永易直子

問題と目的

専門学生の近年の問題：本研究対象者の医療系専門学校生である医療秘書科の学生においては、不本意入学の生徒も少なくない。進路変更を理由とする退学者が増加傾向にあり、不本意入学などによる退学などは専門学校における問題の一つである。

医療秘書の問題：医療秘書の業務内容に関する先行研究では、医師や看護師に代り電子カルテの入力作業などを行い、医師らをサポートする職業として「医療秘書」を試験的に導入する。あるいは診療報酬の面でも医師事務作業補助体制加算が導入されるなど「医療秘書」の必要性がクローズアップされている。(堀, 松田, 水鳥, 中楠ら 2009)

青年期の職業観の発達的变化：職業観は青年期のアイデンティティ形成を論じる時も重要であり、職業の問題からこの点に着目すれば、職業的アイデンティティの形成は青年期のアイデンティティ獲得の基盤になると考えられる。

看護師の職業的アイデンティティとは、看護職選択への自信、自分なりの看護師観、看護職の専門性により医療に貢献できるという自負、看護師として社会に貢献しようと言う意欲を持つことと定義されている。

理学療法教育における臨床実習が、職業的アイデンティティの形成に及ぼす効果を検討したものがある。(大橋, 吉野, 本多, 落合 (2006) その中で、職業的アイデンティティは、早期体験実習は職業的モデルとの出会いを増やしそれにともない職業的アイデンティティも高ま

り、職業的アイデンティティの形成には教育環境の特殊性が影響を及ぼした可能性があると報告している。

本研究では、専門学生で職業体験実習を経験する学生群(実習群)と職業体験実習を経験しない学生群(非実習群)との間には、職業的アイデンティティにおいて差異が生じているのかを、検討することを本研究の主たる目的とした。さらに職業体験実習群において職業訓練実習に参加することが職業的アイデンティティの形成においても影響を及ぼしているかという問題についても検討する。

方法

調査対象者：大阪府内の医療系専門学生で、医療秘書科2年課程女子学生70名と1年課程の医療事務科の女子学生35名の合計105名が本研究に協力者として参加した。

調査時期：2010年5月上旬、実習前、実習終了直後の7月下旬に質問紙調査を実施。

また、一年課程も同じ時期に行った。医療系職業的アイデンティティの形成に関する質問を(藤井ら 2002)実施した。

材料：(1) 職業的アイデンティティの形成に関する質問紙(藤井, 2002)

手続き：本調査は一斉調査法で自由回答とした。フェイスシートには質問調査の依頼文と回答方法を表記し、実習前と実習後の調査を対させるための名前を記入しての実施であるが、統計学的に処理し研究以外の目的に使用するものではない事を説明し倫理的配慮を行った。

結果

医療秘書職業アイデンティティの因子構造

尺度の信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を算出した。その結果、第一因子は ($\alpha = .930$) 「社会貢献」と命名した。第二因子 ($\alpha = .905$) 「有用感」と命名した。第三因子は ($\alpha = .884$) 「医療秘書イメージの形成」と命名した。第四因子は ($\alpha = .881$) 「職業選択の確信」と命名した。プロマックス回転の最終的な因子パターンは、回転前の 4 因子である。また 32 項目の全分散を説明する割合は 66.3%であった。

医療秘書の職業的アイデンティティの 2 要因分散分析の結果

医療秘書の職業的アイデンティティの分散分析を実施した。職業体験実習の効果を検討する 2 (実習, 非実習) (群) \times 2 (実習前, 実習後) (調査時期) の 2 要因分散分析を行った。実習群の主効果 ($F(1, 103)=6.62, p<.05$) と調査時期の主効果 ($F(1, 103)=6.73, p<.01$) が認められた。また両要因の交互作用も有意であった。 ($F(1, 103)=27.84, p<.01$) このことから、職業体験実習を経験することで向上する事がわかった。

下位尺度 社会貢献

実習群の主効果 ($F(1, 103,)=6.62, p<.05$) 時期の主効果 ($F(1, 103,)=21.56, p<.01$)。また、両要因の交互作用も有意であることがわかった ($F(1, 103,)=39.02, p<.01$)。

下位尺度 有用感

実習の主効果 ($F(1, 103,)=7.49, p<.01$) 時期の主効果 ($F(1, 103,)=16.51, p<.001$)。また、両要因の交互作用も有意であることがわかった。 ($F(1, 103,)=7.49, p<.001$)。

下位尺度 医療秘書のイメージ形成

実習の主効果 ($F(1, 103,)=.775, p<.05$) 時期の主効果 ($F(1, 103,)=13.16, p<.001$)。また、両要因の交互作用も有意であることがわかった。 ($F(1, 103,)=19.07, p<.001$)。

下位尺度 職業選択の確信:実習群の効果 ($F(1, 103,)=2.33, p<.05$) 時期の主効果 ($F(1, 103,)=15.9, p<.001$) また、両要因の交互作用も有意であることがわかった。これらの結果により 4 因子すべてにおいて職業体験実習を経験する群は職業的アイデンティティをより早期に形成する可能性のあることが示された。

職業的アイデンティティ全体得点

実習群及び調査時期の主効果 (群 ($F(1, 103,)=6.62, p<.05$) (時期: $F(1, 103,)=21.56, p<.01$)。また両要因の交互作用も優位であることがわかった。 ($F(1, 103,)=39.02, p<.01$)。この事実は職業体験実習を経験する群は、時期を追って職業的アイデンティティを形成する事を示していた。

考察

医療秘書の職業体験実習は、実習前と実習後の分散分析を行うと、職業体験実習を経験すると点数が向上する事がわかった。また実習群と非実習群における職業的アイデンティティの形成の発達の検討であり、実習後の職業的アイデンティティ形成において大きく影響があったといえる。

職業的アイデンティティの形成には、医療秘書としての教科教育だけではなく、専門的な医学知識も求められており、その他にもコスト・マネジメントや高度な判断力問題解決能力なども求められている。医療秘書の教育現場では、十分な専門的教育や職業的アイデンティティを形成出来るための実習へのサポートを、行っていく必要があり、さらなる検討が必要である

主任指導教員 浅川潔司

指導教員 浅川潔司